

## 第2章 活動の内容

### 2-1 データベース作り

#### 2-1-1 洋館付き住宅のDATABASE

磯子、神奈川、鶴見、中、西、保土ヶ谷区において目視調査を行い200棟余の洋館つき住宅をリストアップした。

その存在は街中のランドマークであり、技術や材料を伝承し、地域の歴史を印している。会ではこれを記録に残し、保存再生メンテナンスを手助けする情報発信、見学会の資料などに生かして行く。データは次の資料を元に会員が歩いて確認し、又新たに見つけ、加えている。

- ・'96、'97『身近なまちづくりを考える』活動報告書 ヨコハマ身近な街づくりを考える会
- ・1998年度修士論文「横浜・洋館付住宅」の住まわれ方と周辺環境の変遷 渡辺淳一

#### 2-1-2 分布(地図)

各区の白図にIDナンバー付きの印をプロットした。滅失した場合は×印を加える。

#### 2-1-3 基本データ

所在地、居住者、洋館・和館の外観、敷地の特徴等を書き込み、写真及び住宅地図上の位置を添付した。

#### 2-1-4 ヒアリングデータ

建物の歴史、洋館部分の使い方について聞き取り調査。

造りの良い家、手入れの行き届いている家はデータの宝庫。建てられたきっかけ、メンテナンスと出入りの大工、近所付き合い、戦時中の話など多くの物語を伝えてくれる。

建物と共に語り手の高齢化が進み、急かされる。



分布図の例1



分布図の例2

2-1-5 データベース考察

地形

- ・武蔵野台地の縁にある横浜では、洋館付き住宅は海に向かう台地の縁・斜面・麓に建ち、埋立地には見当たらない。よって地盤はおおむね良好。
- ・南斜面で日当たりが良く、水はけも良さそうだが、中腹に建つ場合は宅地造成され、盛土に乗っている部分に地盤沈下が見られる。
- ・井戸、湧き水を家の背後に持つ家が多い。
- ・海岸線に沿った旧道、および麓と頂を結ぶ坂道に面して建ち、おおむね道幅は狭い。
- ・日当たり、水、防災...人が住む環境は縄文時代の遺跡が示すようにいつの時代にも変わらず共通している。洋館付住宅の分布を見ると、居住性の良いところに建てられていた事が解る。現代は自然環境を大きく変える工法に任せて、谷底でも崖地にでも建設しているのが好対照。

時代

- ・大正時代から昭和10年頃までに竣工している。
- ・関東大震災、第2次世界大戦の災害を潜り抜けて現存している。

これからについて

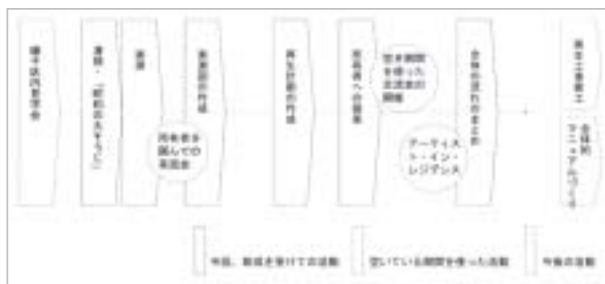
洋館付住宅に馴染んでくると、まちの地形・雰囲気・賑わいの程度などから存在を予感することができ、目に飛び込んでくるようになるから面白い。データの集積により、その特徴的なスタイル・仕上材などを地域性・施工者・建築時期などで分類し、他地域との情報交換にも生かして行きたい。

基本データの例

ヒアリングデータの例

## 2-2 改修工事コンサルティング

よこはま洋館付き住宅を考える会では、活動の一環として洋館付き住宅の所有者に対する住み続ける為の支援を継続的に行ってきた。その一つとして、本事業中も引き続き進行中であった2棟の住宅の改修工事コンサルティングの概要をここにあげる。



### 2-2-K 磯子区 K 邸

#### 2-2-1 大そうじ「昭和の大そうじ」

##### 事前調査

春とはいえ、まだまだ寒い3月24日、会のメンバーと所有者夫妻とで事前に段取りを行いました。まず、所有者夫妻立ち会いのもと家中を点検し、捨てる物、残す物をリストアップしました。何せ60年の歴史と、さまざまな思い出のこもっている品ばかりです。リストアップは大変でしたが、家が建てられた当初購入されたと思われる、昭和初期の物品を会のコレクションとし、その他の物は基本的に全て処分することとしました。コレクションとなった物は今後さまざまな会の活動で、昭和初期の暮らしを直に伝えるものとして、

展示、ワークショップ等に使われる予定です。

##### 大そうじ

一週間後の3月31日、午前中より掃除を開始しました。そうじには所有者夫妻、当会から8人、関東学院大学黒田研究室より3人、神奈川総合高校の生徒が当会メンバーである先生に引率される形で7人、総勢20人が参加しました。さらに事前調査の際委託することを決めた業者からの3人が加わり、3トントラック3台を利用しました。この掃除では特に「昭和の大そうじ」として、「家を大切に扱うこと」ということを通じて当時の暮らしを体験するため、掃除機などの家電製品を使わず、はたき、箒、雑巾のみを使って清掃を行いました。このことは今後の会の活動テーマの一つである、昭和の暮らしの「体験学習」を実際に行うにあたっての、予備的活動にもなりました。雪混じりの雨が降るといった気候の中掃除が続けられ、最後には別の家になったかのように家中綺麗になりました。

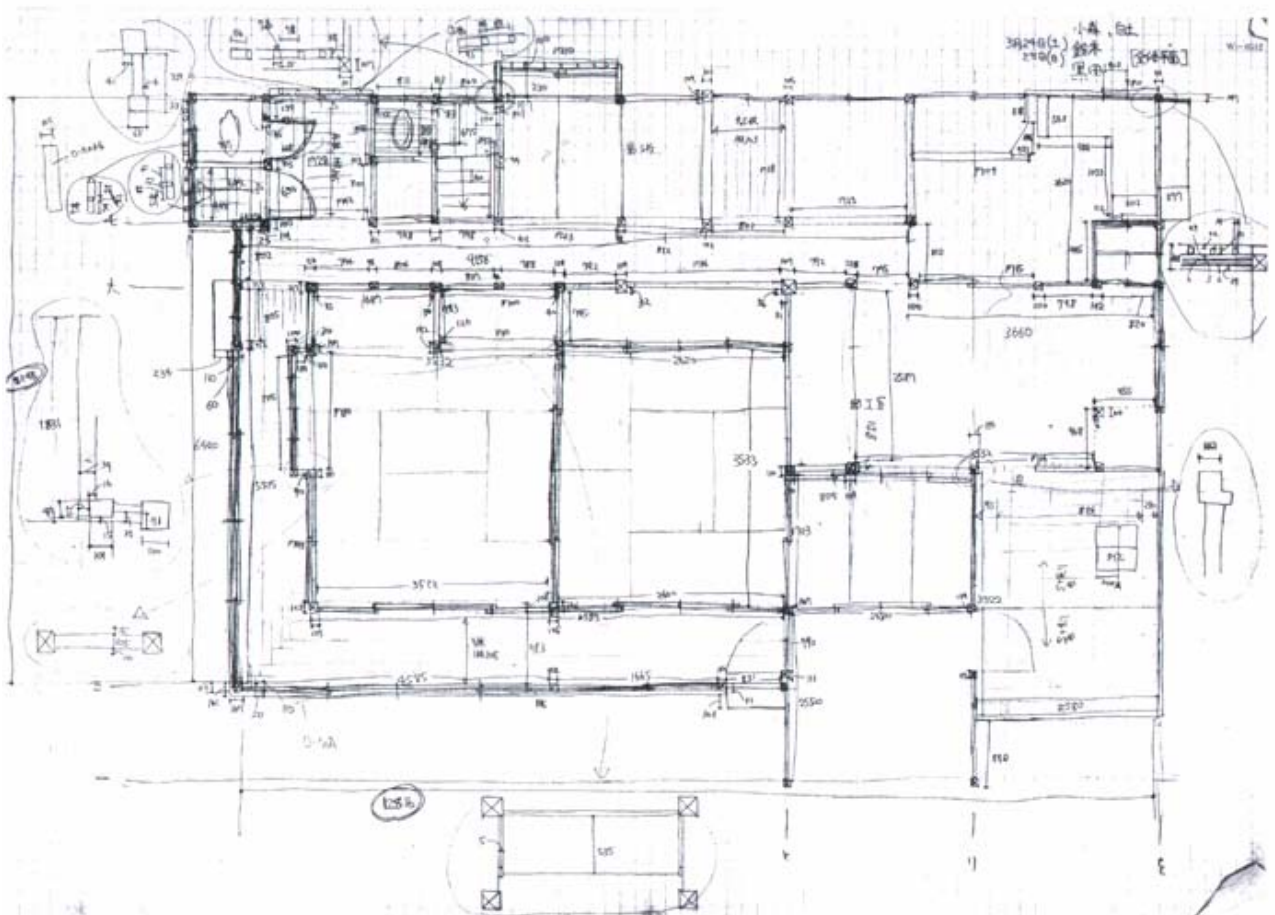
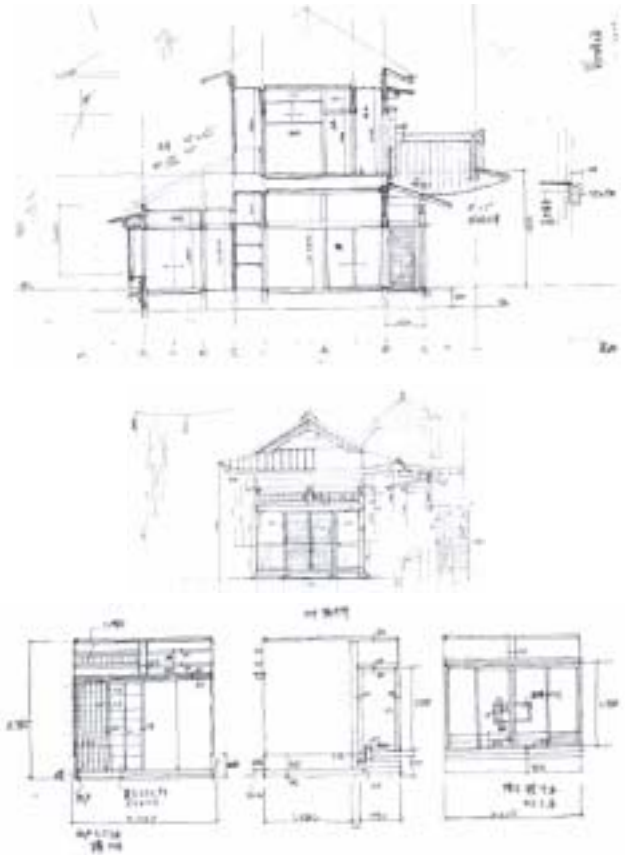


## 2-2-2 実測調査

3月24日、25日、掃除が一方で行われる中、実測調査を行いました。調査者は当会のメンバー6人と関東学院大学黒田研究室の黒田恭介講師と学生8人。洋館付き住宅の中でも質が高く、特に洋館部分が原型のまま残っているという今回の建物について、今まであまりその記録が取られてこなかった点からみて、1.現状を記録に残すこと、2.改修計画の基になるデータを取ることに2点について留意し、作業に入りました。

作業内容としては、立面・平面・平面詳細・断面・部分詳細・架構・内部展開・建具の記録を取りました。立面、断面、断面詳細を取る際にはレベルを出し、基準線から各高さを出すことをしました。実測調査においては、2日目があいにくの雨になり作業は難航しました。しかし雨のおかげで様々なこと（洋館部分と和館部分のつなぎ目で、洋館屋根のフランス瓦と和瓦の屋根との重なりが雨仕舞いを悪くしている点、独立性の高い洋館の良さ、対称的に深い庇と開放的な縁側で雨の日

も軒下で戶外生活が送れる和館の良さ等）がわかりました。また洋館部分に比べ和館部分は痛み具合が見つけやすかったり、修理がやりやすそうだったという特徴もありました。



## 2-2-3 実測図

実測図の作成は、なかなか各担当者が一同に集って作業が出来ない点、今後の実施作業に実測作業をそのまま生かす点から共通のソフトを使ってCADで行いました。



現況の平面は中廊下式で玄関脇の洋間タイプの典型的な洋館付き住宅といえます。和室は比較的広く開放的であり、特に2階の二間は障子を開け放せば、ガラス戸に囲まれたとても明るい部屋になる。磯子湾の埋立以前はここからも海も望めたと思われます。

実測の結果 a.和館部分については、

1. 和室としては異例の天井高であること
2. 旧女中部屋を仕切る建具がなかったこと
3. 急で不自然な位置の階段
4. コンクリート基礎に土台がのる構造
5. 便所脇の不思議な残余空間のこと



などがわかりました。また2階庭側の鴨居がだいぶ下がってきていて建て付けが悪くなっていたり、洋館部分と和館部分の境界の大玄関側に雨漏りがしていることなどもわかりました。

## 2-2-4

## 再生案作成

作成の流れ 実測図を各メンバーが持ち帰り、それを基に各自の案を提出しました。提出された案を一度メンバーだけで検討した後に改めて作成した案を提出し、それをもとに会の案をまとめました。

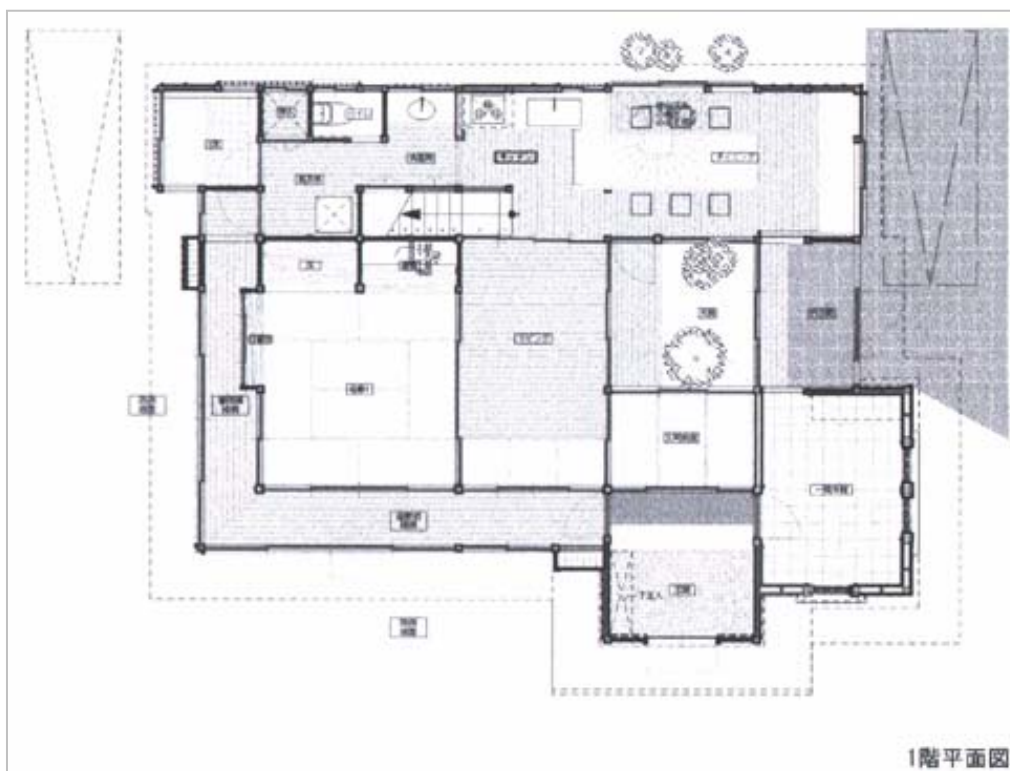
## 洋館付き住宅の会としての提案

## 作成案の特徴

昭和初期、70年前の住宅をいかに現代の暮らしに合わせつつ、保存すべき所は残し、全体とし

て、当時からの暮らし・住まいの雰囲気を保たせるかが一番の主題でした。結果として一間洋館・大きい和室・玄関の一部はそのまま残し、北側の付属室部分を現在の生活に合わせる改修を行うこととしました。このことは中廊下を挟んで主室と付属室が分かれる、中廊下式プランだからできた改修手法でもあります。

また、雨仕舞いの悪くなっていた洋館和館の軒が接している部分(プランでは玄関奥、洋館の脇)は雨漏りがしていたので撤去、外部空間とし、玄関や居間の採光を採ることとしました。



1階平面図



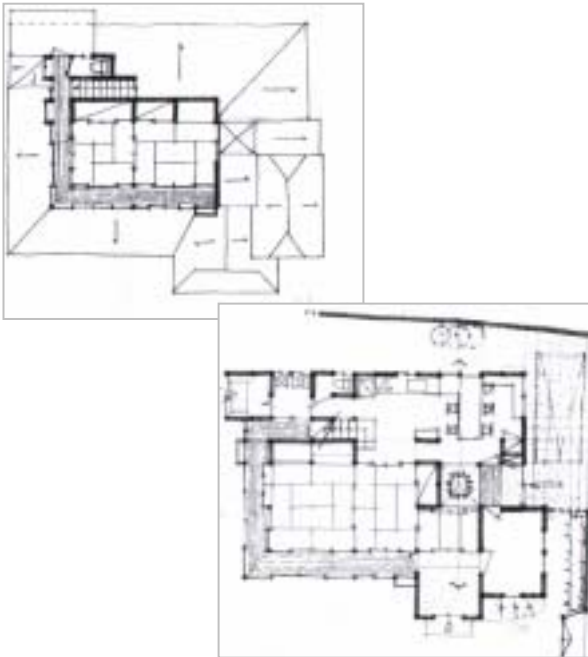
2階平面図

## 再生案作成2

各メンバーの提案 独立性の高い洋館の良さ、二間続きの和室を取り巻く縁側など、今ではない生活に対応した間取りに対し、各自それぞれ考慮した様々な提案がなされました。

## 提案01

作成案の特徴：もう一つ内玄関を道路側に設ける案。北側部分は居住スペースとして大胆に改造し、座敷・洋館を保存する。その二つを中庭で繋いでいる。



## 提案03-1

作成案の特徴：リビングについて、畳敷きの椅子座の空間を提案している。



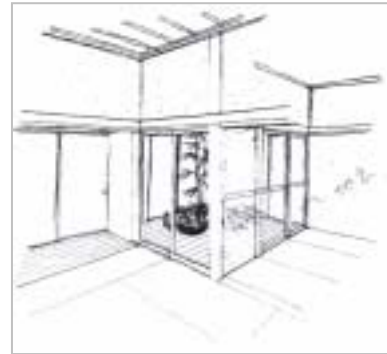
## 提案02

作成案の特徴：今まで台所だった部分を思いきって削り、駐車スペースや庭に改造する案。



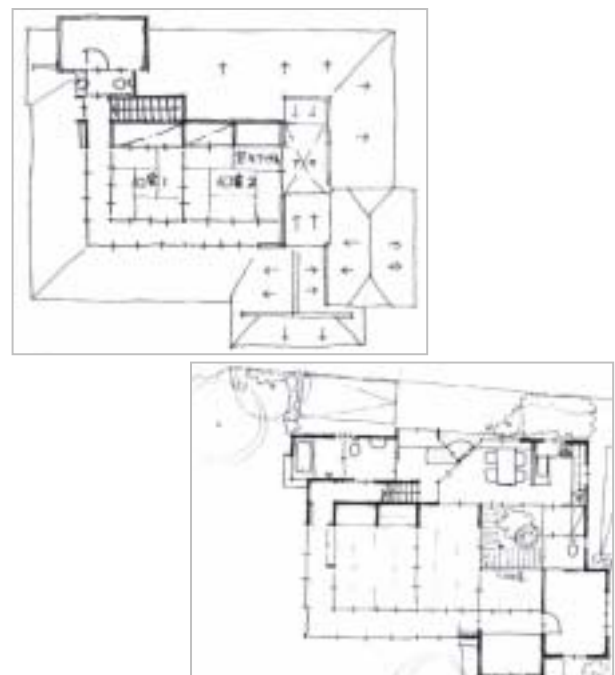
## 提案03

作成案の特徴：採光や通風を得るため4畳半大の坪庭を、洋館部分と和館部分のつなぎに設ける案。



## 提案03-2

作成案の特徴：裏の小道からのアクセスを提案する案。



## 提案 04

作成案の特徴：北東の台所部分を撤去し、そこを洋館や一階の住戸や二階の別世帯の住戸へアクセスするスペースとした案。

## 提案 06

作成案の特徴：駐車スペースを北東に設け、台所・食堂は、座敷を改造した茶の間に面して作る案。急勾配の現状の階段をやめ中廊下部分に新しい階段を新設する。

## 提案 05

作成案の特徴：今まで台所だった部分を玄関にし、洋館に付属して台所と食堂を設け、回遊性をよくした案。 2階 平面図

## 提案 07

作成案の特徴：一階部分を板敷きのフロアとし、その中に入れ子状に座敷を残す案。洋館と和館の接続部は半外部のデッキとし、庭をもうひとつそこに作る。

## 提案 08

作成案の特徴：玄関と新たに設ける土間とで、洋館を離れのように独立した部屋として扱う案。また、茶の間として土間と軽く仕切られた座敷を設け、キッチン・茶の間・洋館・土間の回遊性を生み出している。

## 2-2-5 所有者夫妻へのプレゼンテーション

模型を使いつつ各自の提案を分かりやすく説明しました。所有者夫妻も熱心に聞き入り、たく



さんの質問をして下さいました。このことが、後の実施プラン作成の際の活発な意見交換へ繋がった理由です。このような、会側と所有者側との、住宅再生へ向けての方向性の共有が必要だと思われる。

## 2-2-6 実施案決定

## 1階平面図



## 2階平面図





## 2-2 改修工事コンサルティング

### 2-2-T 神奈川県 T 邸

調査依頼を受けた T 邸は昭和 8 年に建てられた洋館付き住宅で、現在も姪に当たる夫人一家が住まわれている。今回は洋館の出窓部分の痛みが激しいので修理をするに当たって、新築当時の姿に修復したいという夫人の要望で実測を行うことになった。

この家はアメリカに住んでいた叔母様ご夫婦が帰国後建てられたもので、普請を請け負った大工の棟梁もアメリカ帰りという、なんともハイカラな生い立ちの家だった。南向きの玄関を挟んで向かって左に一間の洋館、右に和室 6 畳と 8 畳の続き間に広縁がある。この 70 年の間に、増改築や補修を行ったので元の間取りとは違ってきているが、以前は中廊下を挟んで台所や浴室、便所などの水回り、それに女中部屋があったそうだ。8 畳強の洋館にはアールデコ調のフロアスタンドや猫足の応接セットが置かれて、当時の暮らし振りが想像できた。アールのついた白い天井に施された葉っぱのレリーフが繊細で美しい。

今回も関東学院大学黒田研究室の学生さん達と一緒に実測調査を行うことができた。すでに実測調査を何度か経験し、要領を心得ている人も居て心強い。調査は一日目の午後に主力メンバーによって事前調査が行われていて、実測調査に不可欠の平面図、断面図、屋根伏図の粗描きが出来ていた。

二日目の作業は、それを基に、立面図、展開図、天井伏図、構造伏図（基礎伏図、床伏図、小屋伏図）を描き、寸法を測って記入していくこと。同時に下げ振りや水盛り用パイプで、家の水平、垂直を診る。YYJK の兼弘氏が参加者の経験や所属などを聞きながら、各人の担当を決めていく。私は関東学院の構造研究室の滝田さんと一緒に構造伏図を担当することになった。

基礎や土台の状態、小屋組を見るには床下や天井裏に潜らなければならない。そこで困ったのは着替えなど一切持ってきていないことだった。埃

まみれになるのはいいが、帰りにその姿で電車に乗ることを思うといささか逡巡してしまう。そんな時、T 夫人が息子さんの T シャツとタオルを貸してくださった。本当にありがたかった。

身支度が整ったところで、玄関の前室の畳を上げて床下へ。潜るとすぐ目の前の柱の根元に鉛筆書きで「○○32 July 1st SAKAMOTO」とある。「これは棟梁が書いたものでしょうね。アメリカ帰りの人だっていうし。」と T 夫人も加わって、暫しこの家のルーツを辿る。滝田さんは段ボールを敷いてさらに床下の内部へと這って行く。この頃の住宅は人が通れる位床が高く造られているが、それでも基礎や束柱、根がらみを避けて進むのは大変だ。体中土埃で白くなってしまった。

昼食後は天井裏へ。高いところへ登るのが好きという滝田さんは天井板をはずし、松丸太の梁が掛る小屋裏へすいすい登って行く。兼弘氏は「怪我してもいいけど、家にちょっとでも傷つけたら困るよ」と言いつつ下を通過。もっともと納得。内部からでは分からないところは外回りを一周してチェック。概略が分かったところで図面に書き込む。そうこうする内に作業のまとめに掛る時間になった。皆、自分の担当部所を黙々と測り、図面化していたが、それを最後にまとめて並べてみると一軒分の調査図面が出来上がっていた。これを基に黒田研の方々が CAD 図面を作成する。午後には差入れを持って黒田先生も来て下さり、調査にも授業の雰囲気は漂う(?)。

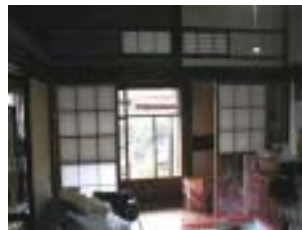
パートナーの滝田さんのお蔭で、私もなんとか担当部所を務めることができた。初めて実測に参加させて頂いて感じたことは、柔軟体操をして体を柔らかくすること、調査道具には着替え・長袖のシャツ・タオル・懐中電灯・虫除けスプレーを用意することでした。次回からは抜かりなく行きたいと思います。

今回は現在も住んでいらっしゃるお宅の実測だったので、住人の T 夫人を始め隣にお住まいのご両親に大変お世話になりました。本当にありがとうございました。「住まいは生き方」と言われますが、T 邸は住む人の人柄が感じられる良いお家でした。



<実測調査参加者>

- 1日目： 関東学院大学（秋山 関口 塚田）  
 YYJK（兼弘 島田 越智）
- 2日目： 関東学院大学（黒田 関口 塚田  
 土屋 小牧 加藤 滝田）  
 YYJK（平山 兼弘 越智 畑 河野 菊池）



## 2-3 見学会

### 2-3-1 見学会の趣旨

この見学会は、横浜市内各区の「洋館付き住宅」を実際に見て回り、広く一般の方に洋館付き住宅とはどんなものなのか、その住まわれかた、地域の関わりかた、地域の変遷、実際にその特異な姿、かたちを認識して貰い、住みつづけることの意義を感じ取って頂ければ、との思いで年4~6回を目処に継続開催している。

#### 1. 磯子区洋館付き住宅見学会

引率：正会員 兼弘 彰

開催日 平成15年1月25日(土曜日)晴  
 集合時間 午前10時  
 集合場所 JR根岸線根岸駅改札前  
 解散 京浜急行屏風ヶ浦駅午後3時  
 見学ルート 根岸駅～下町・旧柳下邸～滝頭～磯子・小宮邸～森～屏風ヶ浦駅  
 (見学会コース図 参照)



見学会コース図

参加者 正会員2名 賛助会員1名 一般7名 計10名

#### 2. 中区洋館付き住宅見学会

引率：正会員 越智英夫

開催日 平成15年3月16日(日曜日)曇  
 集合時間 午前10時  
 集合場所 三溪園入り口前  
 解散 旧柳下邸見学、説明後午後4時  
 見学ルート 本牧大里町～本牧元町～本牧三ノ谷～牧荒井～池袋～根岸町～旧柳下邸(見学会コース図 参照)

参加者 正会員2名 賛助会員1名 一般1名 計4名

備考 旧柳下邸は「洋館付き住宅」として市の公開施設、平成15年2月1日オープン、同時開催「横浜の洋館付き住宅と大正・昭和の暮らし道具展」(YYJK、旧柳下邸共催)



見学会コース図

### 2-3-2 見学開催告知メディア

- ・ 洋館付き住宅の所有者、YYJK 会員及び関係者にチラシ郵送。
- ・ インターネットホームページに案内を掲載。
- ・ 旧柳下邸勉強会及び展示会会場にて告知  
 いずれも最低1ヶ月前に告知することを目処とした。

## 2-3-3 見学コース地域の考察

見学コースの本牧、根岸、磯子の旧海岸線沿いは、大正期から別宅地としての開発がなされ、昭和30年代頃まで漁村と一般住宅が混在していた地域である。その後の高度経済成長に伴い沿海部が大規模に埋め立てられ、一大石油コンビナートが操業され、広域な米軍施設が返還後大再開発されて、大型商業施設や大型マンションが建ち、ミニ住宅開発も多く行われ、最近では海沿いに首都高速の高架高速道が開通したここ数十年で大変化している地域である。その中に取り残された様に三溪園や八聖殿等の名所が点在し、古く規模の大きい住宅や、細い曲がりくねった路地につながった住宅地域があり、新旧混在した特異なエリアとして、再開発や街づくり、リサイクル、建築史的資料のサンプル的地域として、特異な見学コースである。

中区は他の地区より純洋館が多く、洋館付き住宅も分布するが、本牧を中心とした土地柄から、特に純洋館住宅は規模も大きく、程度も良く、資料的価値が大きい。また、磯子区では金沢区まで続く別宅地文化を偲ばせる住宅遺構が多く、格式の高い造りに2階から海を眺めるような設えを持つ別宅建築の風情を残すものが多いのが特徴である。

洋館付き住宅の中には、廃屋化したものや、その対極の往時の形を忠実に復元したように外装を改装した住宅、更に、丹精に維持し住み続けている住宅、又法人使用で料理教室等として再利用をしているもの、竣工当時の姿が大変良く残って



滅失した洋館

いるもの等々、残存形態バリエーションが他の地区にくらべ多様であり、見学コースとして最適なものである。



改装した洋館

旧海岸線に近い場所では、高潮被害を防ぐ為、敷地が道路面より高くなっていったのが印象的である。今回の見学で、ある病院の敷地内にあった、竣工当時の姿で残っていた2階建て洋館が滅失していたことがとても残念であった。



## 2-3-4 参加者の感想

- ・ 旧柳下邸にて当会催行告知を見て、古い建物に関心を持ち参加した。ご高齢にも関わらず、約9キロ以上の行程を完歩され、山手の洋館以外の古い洋館、洋館付き住宅、他一般の住宅を観察する楽しみを改めて知った。(一般参加者)
- ・ 久しぶりに見学参加し、洋館付き住宅のスタイル、外装仕上げの説明に新鮮さと、勉強になり、更に中区の地誌、変遷も知り楽しかった。(賛助会員参加者)

## 2-4 学習会

### 2-4-1 積み上げ型学習会の開催

...学習会の目的と方法...

当会は1999年発足以来、シンポジウムや展示会の開催、現地住宅見学会、横浜市内各区の洋館付き住宅の調査・データベース作りなど様々な活動を行ってきた。こうした活動をさらに充実させるために2003年は、「まちの宝物・洋館付き住宅について学ぶ」と題して、会の顧問の先生方の講義を中心に学習会を行うことにした。

目的：洋館付き住宅についての基礎知識（歴史的、文化的、建築的視点から）を学ぶと同時に、今後の活動の意義および方向を検討すること。その場合、市民活動団体ならではの草の根的視点を失わないようにする。

- ・ 歴史的：洋館付き住宅の歴史的な位置づけ、および将来の環境・町づくりを考える
- ・ 文化的；住まい方からの分析 当時の社会情勢・暮らし方や文化・芸術から読み取る
- ・ 建築的：構造、材料、意匠、技術面からの分析方法：顧問の先生や洋館付き住宅の関係者による講義および洋館付き住宅調査の区毎の活動報告(2003年2月～から6回開催予定)
- ・ 第1回 水沼淑子先生(関東学院大学人間環境デザイン学科教授)
- ・ 第2回 松本高広棟梁((有)松本社寺建設代表取締役 柳下邸改修工事担当)  
(今後の予定：吉田綱市先生、黒田泰介先生)  
参加者：建築専門の方々だけでなく、洋館付き住宅やまちづくりに興味のある一般の方も対象とし、一般公開形式で開催する。

成果品：各学習会の議事録をとり、今後、YYJKの活動を展開する上での基礎資料になるような冊子にまとめる。

以下は2003年2月および3月に開催した

学習会のまとめである。

### 2-4-2 YYJK 学習会

「まちの宝物・洋館付き住宅について学ぶ」

#### 第1回 暮らしの視点で見つめ直す

和洋の暮らし・住まい(家具を使う生活への歩み)

講師 水沼淑子先生

日時 2003年2月15日(土)

午後6時30分～9時

場所 横浜市市民活動センター

クリーンセンター4階

参加者 20名

1.あいさつ 平山 正義

2.会の活動報告

神奈川区の洋館付き住宅紹介 越智 英夫

3.講演：和洋の暮らし・住まい

(家具を使う生活への歩み)

学習会風景



家具を使う生活へのあゆみ

#### 1.いす座の導入

洋館に対して和館、洋風に対して和風 椅子座に対して床座 そしておのおのの組み合わせが自由で豊富にあるがどのように発展してきたか 明治天皇は洋装で椅子座をいち早く取り入れていた。

椅子座の導入は家具を使う生活でもあった。

天皇の椅子座の導入は上流階級の生活様式に影響を与え、白い壁、照明器具、カーテン、机と椅

子などの家具が家の中に取り入れられ洋間だけの洋館、外観は和風で中は洋間、外観は洋風で中は和室、両方あるものなど家の様式にも影響を与えた。

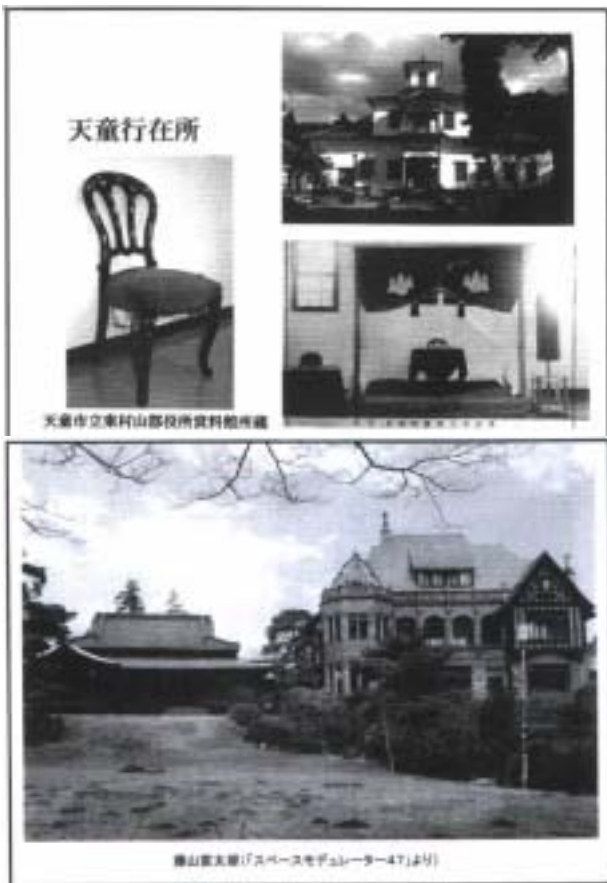
家具を使う生活により家具製造の技術も発達し、元町などには西洋家具専門の家具職人が存在していた。

公的生活に椅子座が取り入れられ、学校や役所でいち早く家具を使う椅子座が一般化された。

## 2. 椅子座の浸透

上流階級の椅子座の生活に対して庶民の一般住宅は床座の住宅が多かったが

上流階級の家が存在する洋間を持つという洋間へのあこがれから家の一部に洋間を持ち家具を



持つという生活が少しずつ広まった文化住宅に現れる応接間に椅子をおくというスタイルが一般の家にも広まっていった。

## 3. 椅子座の定着

公団住宅に代表される2DKは台所と食堂を一体にし椅子座の生活を定着させ椅子を使う生活が広く一般に広まった。

現在は洋風も和風も椅子座も床座もいろいろとりまぜ各自いろいろ楽しんでいる時代になった。

その後質問等活発に行われ時間が足りないほどであったが閉会となった。先生にはパワーポイントを使いながらわかりやすくお話していただいた時代の流れの中から一間洋館を見直してみると新たな発見がたくさんあり興味深いものであった。(報告：藤田靖子)

## 第2回 古いものを維持することの意味

木造建築の保存改修哲学

木造建築の持つ魅力や改修に当たっての理念について

講師：松本高広

((有)松本社寺建設代表取締役・大工棟梁)

日時：2003年3月15日(土)午後1時～4時

場所：根岸なつかし公園 旧柳下邸 居間にて

参加者：29名(内 一般参加者10名) (資料代：500円)

内容：

(1) 代表挨拶と活動報告：平山正義代表のあいさつ、会の紹介の後、正会員の兼弘彰氏より磯子区の洋館付き住宅調査の活動報告を行う。スライドによって15軒程の磯子区で見つけた洋館付き住宅を紹介。根岸から磯子にかけての洋館付き住宅の特徴は別荘として造られたものが多いこと。今回の学習会の会場となった柳下邸も横浜の中心地、中区の貿易商の別邸として建設されたもの。また、この地域の洋館付き住宅は、眼前に海が広がる立地条件から、その眺望を楽しむために2階に座敷きを設けているのが特色であるという説明があった。

(2) 柳下邸改修工事の説明：柳下邸の改修(木工事)に当たった松本棟梁の案内で、邸内を見学する。まず、庭に出て外観を見る。表玄関：傷みの激しかった土台の修復方法について解説を受ける。杉の鏡板：玄関の外壁の鏡板も土台の

傷みの影響で割れて使用できない状態だったこと。円覚寺の板を再利用したこと。屋内に入り、客用手洗所の檜の一枚板の床：手洗い所の床であっても檜の一枚板が使用されていたこと。この板は一本の檜から木取りされていることの説明を受ける。板の割れも木本来が持つ性質から生じたものなので、その性質を生かして修理したという説明。洋館の上げ下げ窓の復元：上げ下げ窓はすべて動かなかった。洋館修復は初めての経験だったので、窓を分解してしくみを理解し、図面化して、修復したとのこと。

現地見学



### (3) 松本高広棟梁の話

木造建築の保存改修哲学

「命」

文化財に指定されているような建物の改修に携わっていると、ものの「命」というものを強く感じる。我々の業界では鉄は400年、コンクリートは100年、樹齢1000年の檜は1000年の命といわれていて、命というものを非常に大切にしている。木には年輪というものがある。日本のように寒暖のある気候では、寒い時期と暖かい時期では育ちが異なる。それを冬目、春目といい、それによって年輪ができる。年輪を数えると木の樹齢がわかる。この柳下邸の柱材は樹齢70~80年の木曾檜が使われている。50年位のものもあるが、樹齢1000年を超えるものはない。鴨居・長押は樹齢200~300年、天井は500年の米杉です。実は米杉であることは今日初めてお話ししました。米杉が使われていることに皆さんは何故と思われる

かも知れません。ところがこの邸が建設された大正8年頃にアメリカから米杉を輸入して使うことは大変贅沢なことでした。当時の秋田杉や吉野杉より遥かに高価なものでした。米杉の丸太を輸入して製材して使ったわけで、港を持つ横浜ならではの木の使い方と言える。

私は木を見ればどこのどういう木か分かる。現在は鎌倉に住んでいるが、生まれは岡山。宮本武蔵の故郷と同じ美作で山深いところだった。美作檜といわれる良質の檜が産出される場所。父親も木材関係の仕事をしていたので、木材の太さや質を見分けることを教わった。子供の頃はお宮参りを日常的にしていたが、ある時お社の中に何かあるか興味をわいて中を見たら石があった。それを外に運び出したが、丁度、人が来てそのままに放置してしまった。その罰で、今になっても神仏に仕える仕事をしているのではないかと考えている。

人は月日を経れば病み、老い、終には命を亡くす。これは人間だけでなく木も建物も同じである。ただ、建物は自分から具合が悪いとは言えない。雨漏りや床鳴りなどの症状が出て、我々に伝えるわけである。そうすると専門家が修理などして直すわけだが、修復や改修をする時、まずすることは、建物を遠くから良く観ること。建物の立地環境を読むことが大切である。この柳下邸も後ろに山を背負っていて、落ち葉や鳥の巣も多い。また海が近い。瓦の状態はどうだったのか？丁度今日はここの瓦の修復に当られた藤井さんかお見えなので質問させていただきたい。

学習会風景





## &lt;雨漏りの原因は？&gt;

藤井禎夫さんの解答：・焼きの悪い瓦があった。・大きな木の枝で瓦が割れた。・下り棟の一番下の大のしが適切な位置になかった。・入母屋屋根の隅棟と下り棟の接点にあるトンネルに葉っぱがつまりそれが土化して詰まっていた。

瓦棧は8分×1寸で通常より大きく、釘も鉄が良質で海に近い立地にも関わらず傷みがすくなかった。修復では同サイズの瓦棧にステンレス釘を使用した。

また、基礎が傾いていたりする場合も原因を突き止めなければならない。柳下邸では先程見た表玄関の所の土台の腐りが該当する。また、この工事後半大変だったのは鴨居がすべて下がっていたこと。建具がまともに納まっていなかった。これは経年変化によるもの。すでに屋根瓦の修復が済んでいたのに、長押を外して真ん中の吊り束の胴付きをつめて持ち上げた。長押を止めてあったのが45ミリのビスだったことが良かった。これは当時としては珍しいことだが、修理には幸いした。

## &lt;ここで柳下邸の修復工事に関する質問を会場から受ける&gt;

Q1. 米杉を使っているが、何か利点があったのか？

A1. 利点、欠点というのではないと思う。日本の木でこのような大きな木、直径2メートルもあるような、はなかつたと言っている。柳下さんはこの木を見て使ってみたかったのだと思う。丸太で何本か輸入したものを製材して使っているようなので。

Q2. 天井板の笹目というのは？

A2. 笹の葉っぱみたいにすっすっとなっているもの。何故このような目になるかというのと、古い木は凸凹してくるんです。天然の絞り丸太なども同様。ただ相当古い木でないとこのようにはならない。なので、これは500年位は経っていると思う。

Q3. そんなに大きな木なら、もっと幅広く使ってもいいと思うが？

A3. あまり広くは使えない。特に天井は室内側と天井裏では温度差があり、木が伸び縮みするため。幅1尺5寸が限度。

Q4. 昔は町に大工さんだ居て、お互いに技術を競ったと言われるが、柳下邸の場合もそういう大工さんが造ったと考えられるか？

A4. 松本：そう思う。現在、この近くの小宮邸の修復を会の依頼で工事開始したが、その家の棟梁と柳下邸は同じ人だと思う。やり方が同じだから、分かるんです。

兼弘：この近くに大正時代から3代続く安藤工務店というのがあるんですが、恐らくそこがやったのではないかと思われる。

松本：棟梁の落書きがあると分かるんだが、探してみたがここには無かった。昔は良く書かれていて、それからいろいろなことが分かった。ちなみに、当時の大工手間は賃は大正9年で一日2円90銭。米が10kg当り3円80銭。

兼弘：当時の住宅建築費は庶民の住宅で1500円/棟、ちょっと高い洋館付き住宅で3000円/棟、高級住宅で4000円/棟。今の価格の一万分の一。

Q5. 洋館部分の建築費はどのくらい掛かったか？

A5. 普通の部分の倍掛かっただろう。これを今建築すると坪当たり200万円掛かると思う。ただし、この住宅を造った大工は宮大工ではないと思う。宮大工に匹敵する腕はあったと思うが。玄関の持ち送りが社寺建築のまねをしていることから推測できる。

## &lt;命についてのまとめ&gt;

木の建物を木の命のままに残して行くことは当たり前なことだと思う。一人一人の命には限りがあるが、後に残る子供達に命は繋がっていく。命は祖先から受け継ぎ未来に繋がっていくこと。

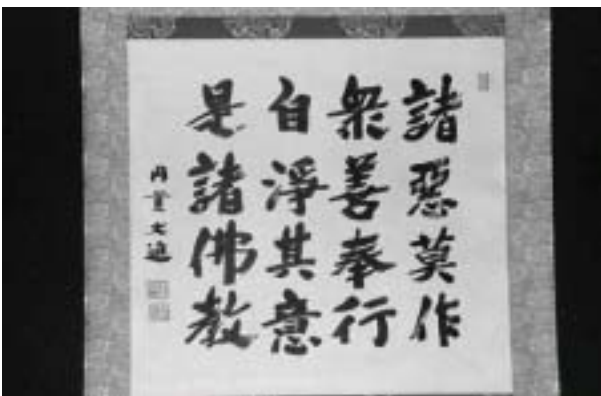
このことが明白ならば、木の寿命のままに精神誠意努力して保存して行く事が、自然であり当たり前前の事であるということが分かって頂けると思う。

### 「仏法」

宮大工の西岡常一さんを尋ねて弟子入りをお願いしたが果たせなかった。その時棟梁が言われた「仏法を知らずして堂塔伽藍を造るべからず」という言葉が強く心に残った。現在、鎌倉・瑞泉寺の境内に作業場を持つ。仏法の大切さを感じている。

今日は現在の円覚寺管長、足立大進老師の掛け軸をお借りしてきた。ここに書かれていることが仏法とは何かを知るにはもっとも適切と思われるので、皆さんに見て頂きたい。この言葉は釈迦の10大弟子の一人、アラン・ソングヤさんが言った言葉で、後に白楽天がちょう下和尚に仏法とは何かと問うた時に、和尚が言ったそうだ。「諸悪莫作 衆善奉行 自浄其意 是諸仏教」(諸々の悪為す事勿れ 諸々の善を行えそうすれば自分の心が洗われる そう仏が教えた)これを聞いた白楽天は「そんな事は3才の子供でも分かる」と言い返した。すると和尚は「3つの子でも分かる事でも、80歳まで生きても行う事は難しい」と言ったという。

掛け軸



今日は軸と一緒に利休居士の好んだ菜の花を持参し、床の間に飾った。花と軸で何を言わんとするかを理解して頂けたらと思う。これを禅語で「黙説了也」と言う。語らずとも互いに向かい合う事で、双方の思いが分かり合えるということだ

が、これは修復工事を行う者同志にも生まれるものであり、今日、ここに来られた方々とも通じるものであると思う。今日はどうもありがとうございました。

社寺建築物に長年携わられ、保存改修工事にもあたってこられた松本棟梁は、技術的なことよりも、その根本にある、ものの「命」や「仏法」について多く語られた。我々は目先の事象に左右されがちだが、修復・改修された柳下邸の居間で伺った棟梁の話は「ものの命」を改めて見つめ、考えるひと時となった。(報告：菊池邦子)

## 2-5 展示会

< 大正・昭和初期のくらしの道具展を終えて >  
 日時：2003年3月10日(月)～3月16日(日)  
 場所：根岸なつかし公園 旧柳下邸 洋館1階展示室及び土蔵1階展示室にて

2003年3月10日から16日の7日間、当会は根岸なつかし旧柳下邸、洋館1階と土蔵1階において「大正・昭和初期のくらしの道具展」と題し、企画展示会を行いました。「旧柳下邸」は横浜市の指定文化財として建物敷地「根岸なつかし公園」内に今年2003年2月1日にオープンした施設で、大正8年竣工の建物を一般の方々に見ていただくとともに家具類などを配置し、大正時代の雰囲気まで体験できるような工夫がほどかされている。なかでも五右衛門風呂の再現は見たことのない子供達には大人気ようである。

以前より当会ではこの「柳下邸」は横浜市磯子区での洋館付き住宅としても調査対象となっており、また磯子区内でもこれほど大規模であるということから大変注目していた建物でありました。今回その建物内部での展示を行えるということは大変うれしいことでもありました。

## 2-5-1 展示内容

## 洋館 1 階展示室

旧柳下邸の大きな特徴として 2 階建ての洋館があります。洋館付き住宅の横浜市内の調査を数多く行ってきましたが、その中でも規模的には大きく、他にはない特徴として 1 階床は畳敷きになっています。展示はその 1 階の漆喰壁とショーケースにて行いました。

## 洋館 1 階展示風景



当会に寄贈していただいた大正、昭和初期の小学校の教科書や、婦人向けの雑誌などの書籍の展示作業中に、一般見学者に教科書を見せてほしいと声をかけられました。その教科書はその方の小学生の時に使っていたものと全く同じものだったそうで何度も何度もなつかしい、とおっしゃっていました。昔（戦前）の小学校 1 年生の教科書はカタカナからならったそうでその教科書はほとんどがカタカナで書かれていました。

## 土蔵 1 階展示室

和風の母屋から屋根続きで行くことのできる土蔵は、元横浜関内で大商人であった柳下家の象徴もいえる大きく立派なものです。その土蔵 1 階部分にあるショーケース内には洋館の屋根に使われているジェラール瓦の展示が行われている。建設当時に使われていたジェラール瓦の複製もの（赤穂製）今回横浜市が修復工事でおこなった復刻製のもの、そしてそれらの見本となった本物のジェラール瓦の 3 種類が比較できるように陳列されまた、柳下邸家で商売用として実際に使われていた大きなはかりが展示されている。

当会の会員や一般の方々から当会に寄せられた大正・昭和初期のくらしの道具類を多数所有しています。今回、この旧柳下邸でたくさんの方に見ていただくと共にその道具から大正・昭和初期の頃の生活を懐かしみ、また新たに発見していただけるのを目的に数点寄贈させていただきました。展示会はそれら寄贈品の時代や使い方などの言葉をそえ、お披露目を兼ねて展示しました。

## 展示品とキャプション

## 展示 1：足踏み式シンガーミシン

黒地に金のスフィンクス像の入ったボディ、側面のレリーフ、SINGER のロゴと有機的デザインを組み合わせた脚部。足元の板を踏み込むことではずみ車を回転させ針を上下、布を縫いつつ送っていく。以後のミシンの原型となったアメリカ・シンガー社の代表的スタイル。

## 展示 2：ネコアンカ

陶製のものが一般的だったようです。

## 展示 3：湯たんぼ

冬の夜、冷えた寝具をぬくもらせ、眠りを誘うのが湯たんぼの役目。小判型のブリキの物も有った。ろうと漏斗を使って熱湯を入れ、栓をする。それを刺し子の袋に入れ、口をきゅっと閉め、布団の中に入れる。暖まった頃を見計らって布団に潜り込む。冷たい足先が和らぐ。朝、湯たんぼのお湯

はぬるみ、洗面器に空けて洗顔に使った。

#### 展示4：置こたつのやぐら櫓

中に小さな火鉢を置いた櫓は、こたつ布団で覆われ、暖を取る。天板を乗せてちゃぶ台として生活の中心の役目も担っていた。熱源は炭をおこ熾したり、かまど竈の燃え残りのオキ。灰を被せて火力の調整をした。就寝時には寝具の裾を被せて足温器としても使われた。置こたつは火鉢が、掘りこたつは囲炉裏が変わっていったという説がある

#### 展示5：煙草盆

江戸時代から昭和初期頃まで使われていた「キセル」できざみ煙草を吸うための道具。火種は炭団（たどん）か炭を用いていた。吸い殻は灰を吹いて捨てる。「いらっしゃい。まずは一服」という具合に客に出す光景が（特に下町では）どこの家庭でも見られた。

#### 展示6：桐の火鉢

通常火鉢は陶器製が多く、木製は大型の物にみられます。このサイズでは珍しい。桐は多孔質のため軽く、しかも、断熱性に富み、表面を研磨することで再利用にも適しています。

#### 展示7：五つ玉そろばん

昔中国で考案された計算器。江戸 期から昭和期まで使われ、桁の繰り上がりが、そのまま残るので間違いやすい。昭和10年代頃小学校課程から現在の四つ玉式が出回る。

#### 展示8：七輪と煙突

由来は炭の価格7厘（しちりん）で煮物が完成するの意味。材料は珪藻土（断熱性大、軽い）切り出し又は同土を粉碎、練り、鑄込み成型の2種類。燃料を載せる格子状の灰落しが付き、下に火力調整用空気窓が付く。煙突は七輪内燃料に着火後、七輪上にのせ、空気窓を開けて、火熱により七輪内の空気上昇を促し、炭又は練炭を燃焼させる。（報告：田添かおり）

土蔵展示風景

